

アリストテレス『弁論術』におけるストイケイオン

高橋 祥吾

1 序

『弁論術』のなかで、アリストテレスがトポスがストイケイオン (στοιχείον) であると言っている箇所がある。アリストテレスの著作のなかで、特に数多くのトポスを列挙している『トポス論』の中で「トポス」概念が明確に定義されたり説明されたりすることはないため、『弁論術』のこの箇所はトポスを理解するために引用されることも多い。しかし、トポスを理解するため引用されているとは言っても、そもそもストイケイオンもどのような意味で用いられているのかはそれほど明らかではない。そのため、トポスの定義としてはあまり役に立っていないように見える。トポスとストイケイオンが同じであるならば、どのような基準で、あるいはどのような理由で、アリストテレスはトポスとストイケイオンを使い分けているのだろうか。本稿では、Grimaldi と堀尾の解釈を利用して、『弁論術』第一巻第二章の最後でアリストテレスがストイケイオンについて述べている箇所の解釈を中心に検討して Grimaldi の解釈を斥けつつ、さらに『トポス論』のストイケイオンとトポスの関係を援用して、『弁論術』のストイケイオンの用いられ方をできる限り明らかにすることを試みる。

2 『弁論術』のストイケイオンに関するテキストとその解釈

『弁論術』の中でストイケイオンについて述べている箇所は5ヶ所存在する。そのうちの1ヶ所は『弁論術』第二巻24章(1401a28–29)に出ているもので、この箇所のストイケイオンは「字母(アルファベット)」の意味で使われており、本稿の問題とは関係がない。残り4ヶ所のうち、2ヶ所で、トポスとストイケイオンが同じであると述べられている。最初に検討する箇所は『弁論術』第二巻第26章冒頭である。ストイケイオンは次のように言われている。

[テキスト1]そして、「増大」と「減少」はエンテューメーマのストイケイオンではない。というのは、ストイケイオンとトポスを同じものであると、私は言うからである。なぜなら、ストイケイオンとトポスは、多くのエンテューメーマがそれへと帰着するところのものだからである。(Rhet. 1403a17–19)

ここでは、トポスとストイケイオンが同じであることを述べるだけでなく、トポスとストイケイオンが「多くのエンテューメーマ¹がそれへと帰着するところのもの」と述べられている。この説明をもって、不十分であってもトポスの定義とみなすことができるかもしれないが、トポスとストイケイオンの違いは不明瞭である。しかし、トポスとストイケイオンは、「多くのエンテューメーマ」が帰着するものであって、すべてのエンテューメーマが帰着するものとは考えられていないと言えるだろう。実際、アリストテレスは『弁論術』の中で、「種」とも呼ばれる諸命題、つまりトポス以外のものによってエンテューメーマを作り上げることができると考えている(1358a10–28)²。

¹新版アリストテレス全集の堀尾訳では、エンテューメーマは「想到法」と訳されているが、本稿では、「想到法」の訳語が適当であるかを判断することをしないために、ἐνθύμημαをそのまま「エンテューメーマ」と音訳する。

²この「多く」という表現について、堀尾は「想到法の全体からみればこうした汎用の論法に依拠するものはむしろ限られており、種別的な命題を前提とするものが大多数を占めるだろう」(堀尾2017, 233n1)と述べる。しかし、ここでは種別的な命題によって作られるエンテューメーマ比較として、トポスによって作られるエンテューメーマの数を比較しているわけではないだろう。

そして、ここでストイケイオンと同じだと言われるトポスは、以下でも検討するが、通常「共通のトポス」だと見なされている。

二つ目の箇所は、『弁論術』第二巻第22章1396b20以降である。ここでもストイケイオンとトポスは同じものであると述べられている。

[テキスト2]さて、このようなトポスのための方法(οὗτος ὁ τοπικός)は、[前提を]選択するひとつの方法であり、第一のものである。そして、我々はエンテューメーマのストイケイアを述べることにしよう。そして、わたしはエンテューメーマのストイケイアとトポスを同じものであると言っている。(Rhet. 1396b20–22)

先のテキスト1から、「エンテューメーマのストイケイア」は共通のトポスのことだと思われる。むしろ、この箇所を解釈する上で課題となるのは、οὗτος ὁ τοπικόςの部分である。指示代名詞 οὗτος が何を指示していて、τοπικόςにはどのような意味が含まれているのかは明確ではない。Grimaldiは、「固有のトポス」というものがあると解釈しているため、この οὗτος ὁ τοπικός は、その固有のトポスを念頭においた表現であり、第一巻4章から第二巻第17章で語られている事柄が該当すると考えている(Grimaldi1988, 286–7)。さらに、1358a32–33で固有のトポスについて話しはじめることを提示していることを受けて、その結論が1396b28–34で述べられていると、Grimaldiは解釈している(Grimaldi1988, 287)。

その1396b28以下でアリストテレスは次のように述べている。

[テキスト3]さて、有益で必要なものどもの諸々の「種」のそれぞれをめぐる諸トポスを、我々はほぼ手にしている。というのは、[諸々の「種」の]それぞれのをめぐって諸命題が選択されたのであり、その結果として、それらに基づいてエンテューメーマをもたらしべきものであるところの、善や悪、美や醜、正や不正についての諸トポス、また性格や感情や持ち前についての諸トポスも同様に、すでに把握されたものである諸トポスが事前に我々に備わっているのである。

そしてさらに、あらゆることについて普遍的に使えるもう一つの方法を我々は手にすることにしよう。そして、論駁的なトポスや論証的なトポス、そして見かけ上のエンテューメーマに属していて、もはや推論ではないので本当のエンテューメーマではないもののトポスに注意を払いつつ述べることにしよう。(Rhet. 1396b28–1397a3)

ここで言われている「種」のそれぞれをめぐる諸トポスのことをGrimaldiは「固有のトポス」と解しているのだと思われる(Grimaldi1988, 288)。この「種」のそれぞれをめぐる諸トポスがテキスト2の οὗτος ὁ τοπικός に対応していると考えられる。そしてそれに対置される形で、「あらゆることについて普遍的に使えるもう一つの方法」が述べられており、この方法はストイケイオンであり、ストイケイオンと同じであるトポスと結びつけられるだろう。

それに対して、堀尾は固有のトポスというものを想定していないため、『トポス論』第一巻第13章と第14章の言及を参考にして、そこで述べられている推論のための命題を選択する手法と関連付けているのである(堀尾2017, 203n14)。この堀尾の解釈に従うと、指示代名詞 οὗτος は直前の1396a33–b18を指しているということになるだろう。そのため、96b3の『トポス論』への言及に着目している(堀尾2019, 33)。そして、堀尾は τοπικός を「トポスを調達するための」と訳している。したがって、οὗτος ὁ τοπικός は、Grimaldiの解釈とは異なり、トポスそのものではないことになる。

このような対立する二つの解釈の中から三つのことを指摘しておきたい。ひとつ目は、「固有のトポス」というものがあるのかは対立があるとしても、アリストテレス自身がストイケイオンと

トポスは同じであると言いながら、「エンテューメーマのストイケイオン」とは異なるトポスが存在することを認めているということである。

二つめは、Grimaldiの解釈では「固有のトポス」とは「種」のことであるが、この箇所では「種」のそれぞれをめぐる諸トポスが存在することが明示されているわけであるから、「種」そのものがトポスだという理解は難しいように思われることである。

三つめは以下の通りである。堀尾は「あらゆることについて普遍的に使えるもう一つの方法（*ἄλλον τρόπον καθόλου περὶ πάντων*）³」を共通のトポス（堀尾の言い方では「汎用の論法」）であると言っている（堀尾 2019, 34）。この堀尾の理解の場合、*οὗτος ὁ τοπικός* はトポスそのものではないが、それに対応する *ἄλλον τρόπον* の方はトポスであるということになる。二つの *τρόπος* の一方はトポスで、もう一方がトポスではないというのは、あり得ない話ではないが、さらなる理由が求められるだろう。

これらのことから、アリストテレスはストイケイオンとトポスが同じであると言っているが、それはストイケイオンとトポスが指し示す対象の外延が等しいという意味で「同じ」なのではないということがわかる。共通のトポスと言われているトポスがストイケイオンと呼ばれていても、共通のトポス以外にもトポスが存在するならば、外延の一致ゆえに同じと言っているのではないことは間違いないだろう。

この点は、テキスト2で「エンテューメーマのストイケイオン」と述べていることから補強されると思う。テキスト2では、このテキスト以前まででの内容を受けて、*οὗτος ὁ τοπικός* という言い方がなされている。つまり、これまで検討されてきた方法に続いて、エンテューメーマのストイケイオンについて論じていくことが明示されているのである。そのうえで、トポスとストイケイオンが同じであると続けて述べている。このテキスト2以前にもトポスに関する事柄が述べられていたからこそ *τοπικός* という言葉が用いられている。そしてこれからの考察もトポスに関する論述になるが、そのトポスはこれまでのトポスとは違うものであるから、「エンテューメーマのストイケイオン」を述べると言って、そのストイケイオンがトポスと同じであると付け加えているのである。このような記述から、アリストテレスが「種」に関係するトポスの話からストイケイオンと呼ばれるトポスへと話を切り替えようとしていることが窺われる。したがって、*οὗτος ὁ τοπικός* によってトポスが得られるとしても、そのトポスはエンテューメーマのストイケイオンと同じであるとは言えないものだろう。

このように解釈する場合、トポスにいくつかの種類があることと、ストイケイオンとトポスが同じであるという見解との整合性が問題となるだろう。そこで、ストイケイオンについての言及がある三つ目の箇所と四つめの箇所の考察へと移りたい。

ストイケイオンが言及されている三つめの箇所は以下の通りである。

[テキスト4]そして、エンテューメーマのほとんどのものは、これらの、部分的で固有な「種」から語られたものである。他方で、共通のものどもから語られたものはより少なくなる。ゆえに、まさに『トピカ』の中でも語られたように、ここでもそれらに基づいて把握されるべきであるエンテューメーマの「種」とトポスを区別するべきである。そして、わたしは前提命題の個々の種類を「種」と呼び、すべてに同じ仕方で共通のものを「トポス」と呼んでいる。ゆえに、我々は先に種について述べることにしよう。そしてはじめに、弁論術の種類を把握することにしよう。[弁論術の種類が] どれだけあるかを分けた上で、それらについて別々にストイケイアと諸命題を取りあげるためにである。（*Rhet.* 1358a26–35）

この箇所を解釈するには、この箇所の直前で述べられている「固有のエンテューメーマ」と「共通のトポス」を説明している箇所を参照しておくべきであろう。

³堀尾自身の訳は「あらゆる事象について全般的に適用しうるもう一つの手法」である（堀尾 2017, 204）。

[テキスト5] というのも、私が言っているのは、問答法の推論と弁論術の推論は、我々がそれらについてトポスを論じるころのものなのだとということである。そして、このトポスは、正しいもの、自然のこと、政治的なこと、種において異なる多くのことについての共通のトポス(οἱ κοινοὶ)である。例えば「より多く」や「より少なく」というトポスである。正しいものや、自然のことや、政治のことや、[その他] 何であれこれらについて、このトポスに基づいて同じように推論したり、エンテューメーマ[弁論術の推論]を述べることができるだろうからである。

その一方で、「固有のエンテューメーマ」とは、個々の種や類をめぐる前提命題に基づいている限りのものである。たとえば、自然のことについて前提命題があり、それらに基づいては、倫理的なことについてのエンテューメーマも演繹的推論も成立しない。そしてこれら[倫理的なこと]についての他の前提命題は、それらに基づいては自然のことについての[エンテューメーマも演繹的推論も]成立しない。そして、このことはすべてのことについて同様である。そして、かのもの[=共通のトポス]はいかなる類についての精通者も生み出さないだろう。なぜなら、かのもの[=共通トポス]は、いかなる主題とも関係がないからである。(Rhet. 1358a26–22)

この箇所「固有のエンテューメーマ」と訳したのは、ἴδιαである。この語は、Grimaldiによって固有のトポス(οἱ κοινοὶ τόποι)を指していると解釈されてきた(Grimaldi 1980, 74; 349; Grimaldi 1998, 130–1⁴)。そして直前に出てくる「共通のトポス」と対になるものとして考えられてきたのである。このように解釈すると、このテキスト5でἴδιαと呼ばれているものは、テキスト4の「種」であり「諸命題」ということになる。そして、共通のトポスは、テキスト4ではストイケイオンと結びつく解釈できる。このように解釈すると、テキスト1や2で、トポスとストイケイオンが同じであるという説明は、「共通のトポス」とストイケイオンが同じであるという意味として一貫性を持つ。他方で固有のトポスとストイケイオンは同じものではなく、固有のトポスは諸命題なのである。

このようなGrimaldiの解釈は全体を統一的に見ることを可能にしているため、多く受け入れられてきたのだと思われる。しかし、堀尾も指摘するように(堀尾 2017, 35n39)、ἴδιαは中性・複数形であり、男性・複数形のτόποιを直接指すとは解釈できない。したがって、このἴδιαはἐνθυμήματαが省略されていると読むべきだろう(堀尾 2017, 35n39; 堀尾 2019, 27)。そして固有のエンテューメーマがあるということは、固有ではないエンテューメーマがあることを示唆している。

さて、テキスト5の解釈からテキスト4の解釈へと戻ることしよう。テキスト4は『弁論術』第一巻第2章の章末の文章である。このテキスト4の最初の部分では、「種」に基づくエンテューメーマとトポスに基づくエンテューメーマの数を比較していることから、二種類のエンテューメーマが念頭に置かれていることが窺える。そして、テキスト5を考慮すれば、「種」と呼ばれているものと、諸々の(前提)命題が結びつく。そして、ここではトポスと「種」を明確に区別すべきだと述べられている。テキスト4の「トポス」は、テキスト5の共通のトポスと同じものであるはずであるが、κοινοὶという形容詞は付けられていない。そして最後に、次章以降で「種」について述べることを示唆し、その前に弁論術の種類を把握することが宣言されている。弁論術の種類を先に把握する目的として、ストイケイオンと諸命題を取りあげることが述べられている。

Grimaldiの解釈では、「種」であるἴδιοι τόποιとοἱ κοινοὶ τόποιが対比されているので、このストイケイオンはοἱ κοινοὶ τόποιと同じものと解釈される。そして諸命題の方が、ἴδιοι τόποιである「種」ということになる。この第2章の最後の文は、第二巻第22章(テキスト2)までつながっていることになる。先に述べたように、第一巻4章から第二巻第17章がἴδιοι τόποιの論述となり、つまり諸命題についての論述であり、第22章(テキスト2と3)以降、οἱ κοινοὶ τόποιを論

⁴このGrimaldiの論文の初出は、Grimaldi, W. M. A., 1972, “Studies in the Philosophy of Aristotle’s Rhetoric,” *Hermes* 25, Weisbaden: Franz Steiner, 1–151 である。

述するという流れということになる。(Grimaldi1980, 356)

このような Grimaldi の解釈について、堀尾は、『弁論術』第1巻第2章と第2巻第22章が離れ過ぎていて、後者の記述内容を前提して前者を理解するには遠過ぎると述べている(堀尾 2019, 29)。しかし、書き手であるアリストテレス自身が、ストイケイアとトポスの関係を念頭において、全体の構成を把握して記述しているなら、話の遠さはあまり効果的な批判とは言えないだろう。むしろ、堀尾自身も行っているように、ストイケイオンの四つ目の箇所 1362a20 を参照する方が効果があるだろう。1362a20 は以下の通りである。

[テキスト 6] 善や有益さについてストイケイア (*τὰ στοιχεῖα*) を一般的に把握すべきだろう。(Rhet. 1362a20)

『弁論術』第一巻第6章は、「善」についてのさまざまな「種」が語られている章である。1362a20 において、*τὰ στοιχεῖα* という言葉が使われているわけであるが、この *τὰ στοιχεῖα* は *οἱ κοινὸι τόποι* ではないだろう。この *τὰ στοιχεῖα* がトポスであったとしても、それはテキスト3の「種」のそれぞれをめぐる諸トポスのことだと考えられる。*οἱ κοινὸι τόποι* ではないし、テキスト2や3からは、「種」のそれぞれをめぐる諸トポスがストイケイオンであると言える理由は導きだせない。むしろ、「種」のそれぞれをめぐる諸トポスはエンテューメーマのストイケイオンではないことを示唆しているように思われる。

それでは、テキスト6のストイケイオンはどのようなものなのか。堀尾は、この箇所のストイケイオンは、テキスト6の直後の「善」についての一般的な定義のことを指すと解釈している。堀尾は Solmsen を援用しつつ、このテキスト6のストイケイオンが「善」についての諸定義であることを根拠に、テキスト1や2のストイケイオンと、テキスト5や6のストイケイオンは異なると主張する(堀尾 2019, 35)。しかし、なぜ善についての一般的な定義が、ストイケイオンだと言われるのかは明瞭ではない。堀尾は、テキスト6のストイケイオンを「基礎的な規定」と説明する(堀尾 2017, 51n2)。しかし、堀尾は、ストイケイオンの基本的な意味を「それ以上何かに還元されえないような要素」と述べ、テキスト6とテキスト5のストイケイオンを関連付けている(堀尾 2017, 35n44)。また、ここのストイケイオンは「個別的な命題の「基本要件」」であり、テキスト6のストイケイオンが、「具体的には「それ自体のゆえに望ましいものは善い」といった基礎的な規定を指すことは明らかである」と堀尾は述べる(堀尾 2019, 29)。しかし、ストイケイオンをトポスと見なす解釈を採用する Grimaldi にとっては、明らかであるとは言えないだろう。また、堀尾はこのストイケイオンを『分析論後書』の「無中項の前提」を関連付けている(堀尾 2019, 29)。しかし、無中項の前提とこの箇所のストイケイオンを類比的に見るには、さらなる説明が必要であろう。

そこで本稿では、『トポス論』のストイケイオンの用例を検討することで、『弁論術』におけるストイケイオンの意味を考えていきたい。

3 『トポス論』のストイケイオン

『トポス論』でストイケイオンの使用例は、かなり似ている。具体的には以下のようになっている。

[テキスト 7] そして、種が類と同名異義であるかどうか、同名異義に関して既に述べられたストイケイアを用いて、考察すべきである。(Top. 123a28)

[テキスト 8] そして、種差も何であるかにおいて述語づけられると人々に思われているので、既に述べられたストイケイアを用いて、類を種差から分離すべきである。〔そのストイケイアとはすなわち、〕第一に、類が種差よりもより広く語られるということであり、次に、「何で

あるか」の提示について、種差よりも類を語る方がいっそう適切だということである。(Top. 128a20–25)

[テキスト 9] また、特有の類の中に語られたものが措かれていないかどうか、ちょうど先に述べられたように、類についてのストイケイアに基づいて考察すべきである。(Top. 143a13)

[テキスト 10] ゆえに、このようなものすべてについて、反対のものや同列のものに基づくストイケイアを用いて、何か不調和がないかを考察すべきである。(Top. 147a22)

ここでは共通して、すでに述べられた「ストイケイアを用いて」吟味対象を考察すべきであると述べられている。そしてここでのストイケイアは、具体的な箇所は異なるが、どれも別のトポスのことを指していると思われる。しかし、ストイケイアと呼ばれているとき、それは考察のための具体的な指針というよりも、その考察指針を支える基本的な原則のことを指していると思われる。

パテルは『トポス論』のトポスには、規制 (règle) と法則 (loi) の区別があるという指摘をしている。すなわち、「～を考察すべきである」という実践的な規制 (règle) と、そのルールを導き出すための基本的な法則 (loi) なり原則に区別可能だという (de pater 165)。実際、テキスト 8 はまさにそうしたトポス理解を支持する典型例であり、「類を種差から分離すべきである」という規則と、ストイケイアと呼ばれている二つの法則に区別できるだろう。

テキスト 8 で、「既に述べられたストイケイア」と言われているが、想定されるのは 123a5 以降で語られているトポスである。122b37 からアリストテレスは、種差を種の中に措いたかどうかを考察すべきであると述べ、さらに類を種差のなかに措いたかどうかを考察すべきだと述べている (123a1)。その上で、123a5–6 でアリストテレスは、「このような類いのはすべて、同じものを通じて (*διὰ τῶν αὐτῶν*) 考察すべきである。なぜなら、これらのトポスは同じものを共有しているからである」と言う。*τῶν αὐτῶν* がストイケイアを指していると解釈することは難しいが、この直後に、アリストテレスは類と種差の二つの特徴を挙げている。「類は種差よりも広く語られなければならないこと」と、「類は種差を分有してはならないこと」である (123a6–8)。このうち一方はテキスト 8 でも語られているストイケイアである。

テキスト 9 は、『トポス論』第四巻冒頭と関連するだろう。ここでは、類と固有性に関するトポスが、定義に関するトポスのストイケイアであると述べられている (120b12–13)。さらに 139b3–5 では、定義の説明規定 (*λόγος*) が、固有の類のなかに措かれているかどうかや、固有であるかどうかについては、類や固有性に関して語られたトポスによって考察することが述べられている。テキスト 8 において類と種差の関係についての法則 (ストイケイア) が、複数のトポスによって共有されていたように、類や固有性のトポスをストイケイアとして、それを定義のトポスとして使えるということは、ストイケイアとなるものが、複数のトポスによって共有されている、別の言い方をすれば共通に使うことができるということを示しているだろう。

テキスト 7 は同名異義についてのトポスであるが、ここ言われているストイケイアは、『トポス論』第一巻の同名異義についての説明が該当すると考えられる (106a9–22)。そして、この同名異義 (そして同名同義) については、ストイケイアという言葉はなくとも、『トポス論』のさまざまな箇所でもトポスとして取り上げられている⁵。この同名同義や同名異義も、複数のトポスによって共有されていると言える。そして注目すべきこととして、『弁論術』では、見かけ上のエンテューメーラの「共通のトポス」として、同名異義によるトポスが挙げられている (1401a13ff)。

『トピカ論』のトポスは定義項、類、固有性、付帯性という四つ述語様式に基づいて各巻ごとに列挙されているが、その一方で、これらの述語様式の違いに関係なくどの巻にも共通して見いだされるトポスがある。テキスト 10 でストイケイアとされている「反対のもの」や「同列のもの」は、その共通して見いだされるトポスである。Smith が言うところの「対立」のトポスや同位語・

⁵たとえば、第二巻 110b8ff. 第六巻 139b19ff. 148a23ff.

屈折語のトポスである (Smith 1997, xxxi). そして、このようなトポスは、『弁論術』においては、共通のトポスとして扱われている⁶.

以上のように、『トポス論』のストイケイアは、複数のトポスに共有されるもの、あるいは複数のトポスで用いることができるものという特徴があることがわかる。そして、その特徴ゆえに、ストイケイアだと言われていると考えられる。そして、その一方で、『弁論術』と関連付けて考えると、ストイケイアが持つ共有可能性にもテキストごとの違いが見いだせるだろう。テキスト7や10において、ストイケイアと呼ばれているものは、述語様式に関係なく共通に用いることができる。そして『弁論術』では、そのストイケイアそのものを共通のトポスとして位置づけていると言えるだろう。

それに対して、テキスト8では、「類は種差よりも広く語られなければならない」という類が持つ本質的な特徴をストイケイアとして複数のトポスが成立している。このストイケイアは、付帯性や固有性のトポスとして用いることは難しい。テキスト9で類や固有性のトポスが定義項のトポスのストイケイアとなりえるのは、定義項が広義には固有性であり (101b18–23), 定義項は類と種差から作られるからである (153b3ff.). つまり、定義項は固有性や類と本質的な特徴を共有しているから、類や固有性のトポスがストイケイアとして機能するのである。このような観点で考えるならば、二種類のストイケイアを区別することが可能であろう。そして、類という述語様式に固有なストイケイアは、『弁論術』第一巻のストイケイア (テキスト5と6) と結びつけて考えうように思われるのである。

テキスト2では、「種」のそれぞれをめぐる諸トポスがあることが示されていた。これは、テキスト5で言われている「種」そのものが、トポスではないことを示しているだろう。また、「種」のひとつとして考えられる、「善」は、『弁論術』第一巻第6章で取り扱われ、テキスト6では、「善」のストイケイアを一般的に把握すると言われていたのである。そして、『トポス論』で類のストイケイアによってトポスが作られたように、「善」のストイケイアによってトポスが作られるということが考えられるだろう。類の「ストイケイア」は類がもつ本質的な特徴であったが、「善」のストイケイアは、我々が一般的に把握しておくべき、善についての諸々の規定や特徴、あるいは説明のことではないかと思われる。

4 結論

以上のように、『弁論術』におけるストイケイオンを、『トポス論』のストイケイオンと比較して理解するならば、『弁論術』の第一巻と第二巻でストイケイオンの意味は変わっていると考えるべきである。第一巻のストイケイオンは、固有のエンテューメーマに必要な「種」のストイケイオンであり、その「種」について一般的に把握しておくべき規定や特徴であると考えられる。それに対して、第二巻のストイケイオンは、エンテューメーマの構成要素でもあるが、それは多くのエンテューメーマに適用できる共通性を持っているためにストイケイオンだと見なされている。それゆえ、このストイケイオンは共通のトポスでもある。『トポス論』において別々のトポスに共通して用いることができるものをストイケイオンと読んでいたが、『弁論術』ではそのストイケイオンそのものをトポスとしてしまった。それゆえ、アリストテレスは、ストイケイオンとトポスが同じだと言うのである。

⁶ 「反対」のトポスは 1397a7–19 で、同列語のトポスは、語尾変化のトポスとして 1397a20–22 で挙げられている。この二つは共通のトポスの一番目と二番目に挙げられているトポスである。

References

- [1] Grimaldi, W. M. A. 1998. “Studies in the Philosophy of Aristotle’s Rhetoric,” in Richard Leo Enos and Lois Peters Agnew (eds.), *Landmark essays on Aristotelian rhetoric*, New York: Routledge, 15–160.
- [2] Grimaldi, W. M. A. 1980. *Aristotle, Rhetoric I: A Commentary*. New York: Fordham University Press.
- [3] Grimaldi, W. M. A. 1988. *Aristotle, Rhetoric II: A Commentary*. New York: Fordham University Press.
- [4] de Pater, W. A. 1968. “La fonction du lieu et l’instrument dans les Topiques,” in Owen (ed.), *Aristotle on Dialectic*, Oxford: Clarendon Press, 164–188.
- [5] Smith, R. 1997. *Aristotle: Topics Books I and VIII, with excerpts from related texts*. Clarendon Aristotle series. Oxford: Clarendon Press.
- [6] 堀尾耕一 (訳). 2017. 『弁論術』. 新版アリストテレス全集 第18巻. 岩波書店
- [7] 堀尾耕一. 2019. 「アリストテレス『弁論術』における想到法の二類型」. 西洋古典学研究 67. 岩波書店, 26–37.

(たかはし しょうご、徳山工業高等専門学校 [哲学])⁷

⁷本稿は、文部科学省科学研究費補助金 (研究課題番号：17H02257) の研究成果の一部である。

The ΣΤΟΙΧΕΙΟΝ in Aristotle's *Rhetoric*

TAKAHASHI Shogo

The purpose of this paper is to clarify the meaning of the *στοιχείον* in Aristotle's *Rhetoric*. First, we review several texts of the *Rhetoric* in which this word is used, and examine the interpretations of Grimaldi and Horio. In this paper, I reject Grimaldi's interpretation and follow Horio's interpretation which shows the *στοιχείον* in the *Rhetoric* to have two meanings. Next, we examine the examples of *στοιχείον* in the *Topics* and clarify the meaning of this word. In the *Topics*, the *στοιχείον* means the rule or principle to be common to many *topos*. Finally, we clarify the meaning of the *στοιχείον* in the *Rhetoric* from the meaning of the *στοιχείον* in the *Topics*. This paper concludes that the meaning of the *στοιχείον* of the first volume and the second volume in the *Rhetoric* is different. the *στοιχείον* in the first volume of *Rhetoric* means the basic definition of "species." In the second volume, on the other hand, Aristotle calls the rules or principles which are common to many arguments as *koinoi topoi*. Several instances of these rules or principles (*koinoi topoi*) are the same as some *topoi* in the *Topics*.